

# アラビア語モロッコ方言の移動表現について

—移動表現の類型論に基づく実験研究—

高橋 舜

takahashi.shun.tp0@is.naist.jp

キーワード：アラビア語モロッコ方言 移動表現の類型論 経路動詞

## 要旨

アラビア語は移動表現の類型論 (Talmy 2000) の観点から経路と様態の表現形式に基づいて動詞枠付け言語 (経路主要部表示型言語) とされてきた。一方で先行研究では全ての種類の経路が等しく主要部で表示されるのか十分に検証されてこなかった。そこで本稿ではアラビア語モロッコ方言の様々な種類の経路における移動表現に着目し、経路の下位分類が類型論上重要な観点であることを示す。本研究では様々な経路を含む移動事象を捉えた 44 本の映像刺激を用いて 20 名の母語話者を対象に実験を行った。それによって得られた発話データから言語自体を従来の二項対立的な類型に落とし込むことが困難であり、むしろ経路の種類によってそれぞれ異なる表現形式が用いられていることを明らかにする。

## 1. はじめに

どのように人が外界事物を認知してそれを言語によって表現しているかという観点から移動表現の分析は注目されてきた。本研究ではアラビア語モロッコ方言の移動表現のうち、主体移動 (対象の非使役的な、あるいは自立的な移動) の表現を対象に、これまで十分な議論がなされなかった経路の種類による経路の表示パターンの差異を分析する。イベント統合の類型論 (Talmy 2000b: Ch3) では、移動の軌道を表す経路について、文の主要部 (主動詞) で表す動詞枠付け言語とそれ以外の付随要素で表す付随要素枠付け言語に世界の言語が二分可能であると主張した。そして現代ヘブライ語の研究 (Slobin 1997) をもとに、アラビア語モロッコ方言を含むセム諸語は動詞枠付け言語として分類された。その後、現代標準アラビア語やアラビア語諸方言の移動表現の研究 (Darine 2007, AlMurshidi 2013, Louhichi 2018, Alhamdan et al. 2018) によってアラビア語が動詞枠付け言語の特性を持つことが確認されてきた。以上の先行研究を踏まえたうえで本研究では経路の種類に着目することで動詞枠付け言語とされるアラビア語の移動表現についてさらに議論を深める。

本研究では「アラビア語モロッコ方言における移動表現について経路の種類によって表現形式の違いがあるのか」という問題設定のもと、映像刺激を用いた実験によりアラビア語モロッコ方言における各経路の移動表現に関する発話データを集めた。そして経路情報を中心にこれらのデータの分析を行った。その結果、アラビア語モロッコ方言の移動表現において、経路の

表示位置は主要部か主要部外かの一方には定まらず、経路によってさまざまな表示傾向を示すことが明らかになった。そして経路の表示傾向は次のような分類が可能である。第一に多種多様な単一語彙の動詞によって主要部として表示される経路(主要部表示型経路)、第二に単一語彙の前置詞によって主要部外で表示される経路(主要部外表示型経路)、第三に主要部の動詞と前置詞の組み合わせにより表示される経路(主要部・主要部外共表示型経路)、以上の3種類である。

本稿は7節から構成されている。次の第2節では本研究で取り上げるアラビア語モロッコ方言の言語概要と本研究に関連する形態統語的特徴を述べる。第3節では移動表現の分析において重要な諸概念を導入し、移動表現の類型論とアラビア語における先行研究を紹介する。第4節では本研究で行われた実験の内容について説明する。第5節では実験によって得られた発話データからアラビア語モロッコ方言の移動表現における経路表示の形式について解説する。第6節では発話データの分析に基づきアラビア語モロッコ方言の移動表現に関する詳細な議論を展開する。最後に第7節では前節の議論をまとめつつ、今後の移動表現の研究の展望を述べる。

## 2. アラビア語モロッコ方言について

### 2.1. 言語概要

アラビア語はアフロ・アジア語族セム諸語の1つで、他にイスラエルの公用語のヘブライ語やエチオピアの公用語のアムハラ語などがこれに属する。アラビア語は現代標準アラビア語という文語と各地域で話される口語のダイグロシアを展開している。口語としてのアラビア語は西アジアから北アフリカ一帯にかけて広域に分布している。それぞれの地域に方言があり、正書法は確立されていない。

アラビア語諸方言のうち、モロッコ方言(الدارجة, *darja*とも呼ばれる)は北アフリカの西端部のモーリタニアからリビアまでの地域一帯で連続体を成すマグレブ諸方言の一派に属する。その地理的特徴から旧宗主国の言語であるスペイン語やフランス語などの西欧諸語と原住民族のベルベル語などの影響を強く受けている。都市部では今なお、フランス語との二言語併用が見られる。

なお、モロッコ方言の中でも本研究で扱うのは、首都のラバトの若者が話す都市方言である。このような背景からか、今回の実験で得られた発話データの中には標準アラビア語やフランス語、英語などの様々な言語とのコード切り替えも多々見られた。

### 2.2. 形態統語的特徴

現代標準アラビア語がVSO語順である一方で、アラビア語モロッコ方言は通常SVO語順である。名詞には性数による区別がある。主語・目的語の関係は格標識ではなく、語順によって示される。また主語代名詞が省略されるPro-Drop型の言語である。

アラビア語モロッコ方言の動詞は主語の人称・性数によって活用する。下記の表1は“xrez”<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 本研究では動詞は完了形を項目として扱う。

(「出る」) という動詞を例に、おおよそ本論に関わる範囲のみの動詞活用のパラダイムをまとめたものである。アラビア語モロッコ方言における動詞の活用のパラダイムはまず、定形性<sup>2</sup>がない無標形と完了形に二分することができる。無標形は多くの動詞において三人称男性単数の完了形に接頭辞がついた形をしている点が特徴的である。そして無標形に接頭辞“ka-”がつくと未完形になり、小辞“gadi”または接頭辞“ga-”がつくと未来形となる。

表 1. アラビア語モロッコ方言における動詞の活用パラダイムの例 (xre3 「出る」)

	三人称男性単数	三人称女性単数	相	時制
無標形	yxre3	txre3	-	-
完了形	xre3	xr3at	完了相	過去
未完形	ka-yxre3	ka-txre3	未完形相 (進行・習慣)	現在
未来形	gadi yxre3	gadi txre3	-	未来
能動分詞形	xar3	xar3a	進行相	-

次の2つの例文は「ムハンマドは日本語を勉強している」という意味の (1) 現代標準アラビア語、(2) アラビア語モロッコ方言である。

- (1) yadrusu                      muḥammad-un      al-ya.ba.niyat-a  
study.IPFV.1SG.MSC    Muhammad-SBJ    DET-japanese.FEM-ACC

「ムハンマドは日本語を勉強している。」(作例)

- (2) muḥammad    ka-yqra                      3-3aponiya  
Muhammad    IPFV-study.1SG.MSC    DET-japanese

「ムハンマドは日本語を勉強している。」(作例)

(1) では動詞が文頭に位置し、その後の主語と目的語の文法関係は語末の格標識によって示されている。しかし (2) では文頭に主語が来ており、動詞がそれに続いている。また格標識はなく、主語と目的語の区別は語順によって示されている。また動詞の活用パラダイムも異なっており、(1) では無標形が文の主動詞であることで、つまり統語的關係性によって未完形相が表されている<sup>3</sup>。一方で (2) では未完形相を表す接頭辞“ka-”があり、それによって未完形相が表されている。

またアラビア語全般に共通する大きな特徴でもあるが、アラビア語モロッコ方言では一般的に 繫辞が (3) のように、現在時制の場合は用いられず、(4) のように過去時制や未来時制の場合に用いられる。

<sup>2</sup> ここにおける定形性の定義は独立した節を持ち、時制を標示することである。本稿では以降一貫してこの定義に従う。

<sup>3</sup> この解釈については現代標準アラビア語の「未完形」に関する分析をしている Benmamoun, et al. (1999) や Hallman (2015) などを参照されたい。

(3) ihab berlamani

Ihab dupty.INDF

「イハブは議員である」 (作例)

(4) ihab kan / ġadi ykun berlmani

Ihab be.PFV / FUT be dupty.INDF

「イハブは議員であった/議員であることだろう」 (作例)

(5) のように現在時制の文における主動詞が分詞形である場合でも繫辞は用いられず、(3) と同様にむしろ無標であることによって現在時制であることが表される。(6) は過去時制または未来時制の場合で、繫辞の助動詞によって時制が表されている。

(5) lamyā? xarġa men d-dar

Lamyāe exit.PTCP.FEM from DET-house

「ラミヤは家を出ている」 (作例)

(6) lamyā? kant/ġa-tkun xarġa men d-dar

Lamyāe be.PFV.FEM/FUT-be.FEM exit.PTCP.FEM from DET-house

「ラミヤは家を出ていた/出ているだろう」 (作例)

### 3. 移動表現の類型論とアラビア語

本節では移動表現の類型論とそれに関連するアラビア語の先行研究を紹介する。3.1 節ではまず移動表現の分析をするために着目すべき移動表現を構成する基本要素を類型論の観点から導入する。3.2 節では Talmy による移動表現の先駆的な類型論を紹介し、3.3 節ではそれに基づいて展開されてきたアラビア語の移動表現の先行研究を概観する。そして先行研究が指摘する Talmy の類型論の問題点を確認し、さらに先行研究において見落とされてきた課題を明らかにする。

#### 3.1. 移動表現の分析のための道具立て

アラビア語モロッコ方言の移動事象の表現の分析は以下に挙げる Talmy と松本がそれぞれ提示する移動表現の要素概念に着目する。

まず移動表現の類型論において Talmy (2000b: Ch2) は移動事象の言語表現を構成する要素について、次のような定義している。

- (a) 図 (Figure) — 移動事象において際立ちのある動的、または静的な対象
- (b) 経路 (Path) — 対象の移動が描く軌道
- (c) 地 (Ground) — 対象とその移動の軌道の特徴づける参照物
- (d) 様態 (Manner) — 移動における副次的な行動や状態

Talmy はこれらの要素について、海でボトルが洞窟の穴から出てくる様子を模した以下のような場面 (図 1) での英語とスペイン語における移動表現の分析を例示している。

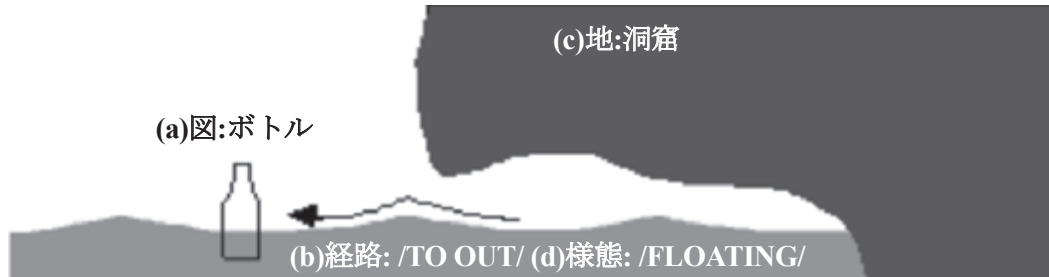


図 1. ボトルの移動

英語:

The bottle floated out of the cave

(a) (d) (b) (c)

スペイン語:

La botella salió de la cueva flotando

(a) (b) (c) (d)

両言語の移動表現は (a) 図はボトル、(b) 経路は/TO OUT/<sup>4</sup>、(c) 地は洞窟、(d) 様態は/FLOATING/によって構成されている。この分析から英語では様態が定形動詞によって表され、経路が前置詞句によって表されている一方で、スペイン語では対照的に経路が定形動詞によって表され、様態は分詞による付帯状況で表されていることがわかる。

なお、移動という要素はどちらの言語も英語では (d)、スペイン語では (b) の、それぞれ定形動詞に含まれている。言語の表現形式におけるこのような複数の要素の含有を Talmy は包入 (conflation) と定義している。従って上記の例においては、英語の “floated” には移動と様態が包入されており、スペイン語の “salió” には移動と経路が包入されているといえる。

また他方で松本 (2017: 17) は Talmy による類型論をさらに発展させて経路に関して以下の分析概念を導入している。

- (e) 経路局面 — 起点、通過点 (通過領域)、着点からなる移動経路における 3 局面
- (f) 位置関係 — 経路局面において、起点、通過点、または着点が地 (参照物) に対してどのように位置しているか、例えば上か下か、中か外かなどを示すもの
- (g) 方向性 — 図が参照物 (地) に近づく、あるいはそれから離れる移動経路の特性

経路を構成するこれらの要素概念に着目することによってより詳細な経路の分析が可能になる。例えば図 1 に示した状況では、ボトルが洞窟の中から外に出た時点であり、言語表現とし

<sup>4</sup> 本稿ではこのように経路や様態の意味内容を//によって示す。

ては (b) 経路のうち、英語は “of”、スペイン語は “de” が洞窟をボトルの移動の (e) 起点として示している。そして英語の “out”、スペイン語の “salíó” がそれぞれ洞窟の「外」という (f) 位置関係を示している。さらに図は地に対して離れるという (g) 方向性がある。

以上、本節では Talmy の提示する要素概念と松本の提示する要素概念を、定義を明確にする目的で概観した。本研究ではこれらを合わせた形でアラビア語モロッコ方言における移動表現の分析を行う。

### 3.2. 移動表現の類型論

移動表現の類型論では言語ごとの表現形式に違いがあるという想定のもとで、各地域の言語の移動表現を分析し、言語における移動事象の表現の形式について一般的な傾向を見出し、言語の類型化を目指す。

移動表現の類型論は Talmy (1985) によって提案され、イベント統合の類型論 (typology of event integration) (2000b: Ch.3) に発展した。この類型論において重要な概念は枠付けイベント (Framing Event) と共イベント (Co-Event)、そしてそれらが構成するマクロイベント (Macro-Event) の3つである。

枠付けイベントとは移動の事象や変化の事象、または恒常的な事象のように何らかの形で時間に関して限定するイベントである。一方の共イベントは枠付けイベントのような時間に関する限定がないイベントのことであり、これには例えば様態や使役、可能などが含まれる。そして Talmy は、共イベントが枠付けイベントに対して補助的な関係 (support relation) を有しており、この関係性に基づく2つのイベントがマクロイベントを構成していると主張する。移動事象というマクロイベントにおいては、経路は空間の移動を通じて時間を規定することから枠付けイベントであり、様態は時間に関して限定的でないことから共イベントであると分析している。イベント統合の類型論ではこれらの概念を基礎に移動事象という複合的な事象の表現形式について世界の言語を類型化する。

このような理論的背景をもとに Talmy は動詞枠付け言語 (verb-framed language) と付随要素枠付け言語 (satellite-framed language) という2つの言語類型を打ち立てた。移動表現においてこの対立は主動詞または主要部 (main verb / head)<sup>5</sup>と呼ばれる動詞とそれ以外の要素、つまり前置詞句や小辞、接辞などの付随要素 (Satellite) のどちらに経路が表されるかによって世界の言語が動詞枠付け言語と付随要素枠付け言語に二分することが可能だと主張している。

この観点によれば前節 3.1 で見た英語とスペイン語はそれぞれ付随要素枠付け言語と動詞枠付け言語に分類される。経路が英語では付随要素である前置詞句によって表されている一方でスペイン語では定形動詞、つまり主要部で表されているためである。Talmy は動詞枠付け言語に含まれる言語にロマンス諸語やバントゥー諸語、ポリネシア諸語、日本語、タミル語などを挙げている。一方で付随要素枠付け言語にはロマンス諸語を除いたインド・ヨーロッパ語族の

<sup>5</sup> 主動詞を通言語的に定義するのは難しく、全ての言語で定形性が主要部を決定づける特性であるとは限らない。Talmy (2016) が主要部を判別するための特性について議論している。また松本(2017)は Talmy の指す主動詞が厳密には主要部であると指摘している。従って本稿では以降、節の主動詞と区別するため主要部と呼ぶ。



言語やフィン・ウゴル語派の言語、他に中国語も含めている。そして本研究で扱うアラビア語モロッコ方言を含むセム諸語は前者の動詞枠付け言語であると分類されている。

### 3.3. アラビア語における先行研究と課題

Talmy による二項対立的な言語類型論に基づいて、これまでにアラビア語の湾岸方言とチュニジア方言、そして文語である現代標準アラビア語の研究がなされてきた。本節ではこれらのアラビア語研究の概要を簡単に紹介し、そこから Talmy の移動表現の類型論における問題点と先行研究で見落とされてきた課題を明らかにする。

まず Darine (2007) はアラビア語チュニジア方言がイベント統合の類型論の観点から分類することができないと主張している。この主張の根拠としてチュニジア方言の以下の3点の特徴を挙げている。それはまず経路と移動を包入する動詞と様態と移動を包入する動詞の2つの異なる動詞が並列する構文が存在する点<sup>6</sup>、次に直示動詞を様態動詞化させる接頭辞“t-”が存在する点<sup>7</sup>、さらに経路と様態が両方とも包入された動詞が存在する点である。

AlMurshidi (2013) は湾岸地域のアラビア語と英語における移動表現の対照研究を行っている。AlMurshidi は物語形式の映像刺激をアラビア語の母語話者に観てもらい、アラビア語と英語でその物語について解説してもらうという形でエリシテーションを行っている。そして同じ方式で得られた英語の母語話者のデータと比較することで、アラビア語(湾岸方言)が動詞枠付け言語であることを主張している。また Darine が指摘したように Talmy の枠付け類型論に当てはまらない、経路と様態が両方とも包入されている動詞の存在を指摘している。

Louhichi (2018) も Darine と同様にアラビア語チュニジア方言を扱っている。移動事象を多分に含む絵本をもとにアラビア語チュニジア方言の話者に物語語ってもらうというエリシテーションを行っている。そのデータをもとにアラビア語チュニジア方言が非典型的な動詞枠付け言語であると主張している。アラビア語チュニジア方言の語りには経路動詞よりも多種多様な様態動詞が現れ、その語彙数は同じ絵本で同じ形式のエリシテーションが行われた付随要素枠付け言語に匹敵している。動詞枠付け言語の様態動詞の数が付随要素枠付け言語よりも少ない傾向にあるという Talmy (1985) の主張や、主要部以外での様態の表現が認知的負荷になるために避けられるという Slobin (2004) の仮説に反していることを指摘している。この点において非典型的であるものの、それを除くと動詞枠付け言語の特徴を示している。

他方で Alhamdan ら (2018) は現代標準アラビア語において語彙カテゴリーとしての動詞に着目している。そして先に述べた Darine や AlMurshidi が指摘するように現代標準アラビア語では経路や様態、使役といった意味要素が様々に動詞に包入される語彙化のパターンが見られるということを指摘しており、Talmy の経路と様態を二分している枠付け類型論では説明しきれないと同様に主張している。

<sup>6</sup> 5.1節で触れる様態動詞の付帯状況による用法を一種の動詞連続構文として分析していると考えられる。

先行研究によって様態に関するイベント統合の類型論の課題が明らかにされた。Talmy は経路を枠付けイベント、様態を共イベントとしてそれぞれ独立しつつ、補助的な関係性によってマクロイベントを構成するとしている。しかし上記に述べたように先行研究を通じて経路・様態・移動の3要素が主要部の動詞に包入されている例が報告されている。アラビア語モロッコ方言でもこの経路が包入されている様態動詞 (あるいは様態が包入されている経路動詞) が存在するため、本稿では 6.1 節で本研究の実験データに基づいて改めて問題点を整理し、様態に関する課題について松本 (2017) の観点を導入することで解決する。

一方で、さらに先行研究に共通する課題として、経路の表現について十分な検証がなされてこなかったということがある。経路といってもその下位分類として様々な種類がある。例えば経路局面の起点、着点、通過点に分けることができるが、言語によっては経路局面の表現形式やその区分に違いがある可能性がある。そこで本研究では映像刺激を用いた実験を通じて得られたデータをもとに経路の種類や性質による移動表現の差異を明らかにする。

#### 4. 映像刺激を用いた実験の概要

本研究では映像刺激を用いた実験を行った。実験には統一的な通言語的ビデオ実験「国立国語研究所 移動表現プロジェクト」のうち、多くの種類の経路を扱う C 実験を利用した。実験キット内の状況説明はフランス語で表記されている。

実験では被験者に異なる移動事象を捉えた 44 本の映像刺激を見てもらい、その場で映像内の出来事について口述してもらった。また現代標準アラビア語や第二外国語による発話への影響を抑える目的から、一連のエリシテーション作業にはモロッコ方言の母語話者に参加協力してもらい、実験における被験者への口頭の指示は全てアラビア語モロッコ方言で行われるようにした。

この 44 本の映像刺激は 4 種類の図 (人間、猫、犬、ボール) と 14 種類の異なる経路 (/TO/, /TWD/, /FROM/, /PAST/, /THROUGH/, /VIA BETWEEN/, /VIA UNDER/, /ALONG/, /CROSS/, /AROUND/, /UP/, /DOWN/, /INTO/, /OUT/) の場面となる。各種経路において人が走っている様子や歩いている様子、他に人や猫がジャンプして移動する様子、ボールが転がって池に落ちる様子など、図は様々な様態を示す。これらに加えて 16 種類の複数の経路からなる場面も含まれている。実験で実際に用いられた映像刺激の例は以下の図 2 に示す。また刺激映像の各クリップに関する詳細な情報は巻末付録 1 を参照されたい。

本研究の実験はすべてラバトのカフェで実施された。実験の参加協力者の内訳は主にラバト及びその周辺の地域の出身者で、かつ 20 代前後の男性 10 名、女性 10 名の合計 20 名である。参加協力者に関する情報一覧も同様に巻末付録 2 に参照されたい。



経路場面: /DOWN/



経路場面: /TO IN/



経路場面: /AROUND/



経路場面: /ALONG/



図 2. 実験で用いられた映像刺激 4 例

## 5. 実験データに基づく経路の表現形式の概観

本節では今回の実験で見られたアラビア語モロッコ方言における経路の表現形式について紹介する。アラビア語モロッコ方言は様々な経路を動詞語彙で表現 (5.1) することが可能である。しかしその一方で付随要素枠付け言語のように経路局面や方向性を示す前置詞による表現形式 (5.2) も見られた。また本節では複数の経路が連続する移動の表現 (5.3) についても紹介する。なお、各例文には原文データ、グロス情報、参考の日本語訳、そしてその右には実験参加者の番号と映像刺激のクリップ番号が記載されている。

### 5.1. 動詞による経路表現

今回の実験では移動における経路を表現する動詞が様々に見られた。経路動詞の特質すべき点として、常に主要部の位置で用いられるという点である。なお、主要部とは文全体の時制を標示する定形性を持った動詞句を指す。

経路動詞は完了相及び過去時制を表す完了形のほかに、未完了形と能動分詞形の両方の形でいずれも現在時制進行相を表すものとして用いられていた。以下の例文のうち経路動詞が (7) では完了形、(8) では未完了形、そして (9) では能動分詞形として用いられている。また様態は (7) と (8) ではそれぞれ前置詞句によって付帯的に表されている。

(7) *ṣaḥb-i tleʕ b=zerba f=d-druj*

friend-my ascend.PRF with=haste in=DET-stairs

「私の友人が階段を早く登った」(02-C1-08)

(8) saħb-i ta-yqtef t-triq b=šwiya

friend-my IPFV-cross DET-way with=little

「私の友人がゆっくりと道を渡った」(02-C1-17)

(9) l-bent ɬalʕa f=d-druz

DET-girl ascend.PTCP in=DET-stairs

「少女が階段をのぼっている」(01-C1-07)

上記の例文では経路動詞が単体で用いられているため、経路動詞が主要部であることは明らかである。しかし様態動詞と経路動詞が1つの節に表れ、一見するとどちらが主要部なのか曖昧な例も見られた。以下の(10)、(11)がその例である。

(10) r-raʒl ka-yxrez men waħd d-dar ka-yzerri

DET-man IPFV-exit from INDF DET-house IPFV-walk

「男性が走りながら家から出ている」(14-C1-14)

(11) l-weld habt f=d-droj ka-yjerri

DET-boy descend.PRTP in=DET-stairs IPFV-run

「少年が階段を走りながら降りている」(17-C1-10)

どちらの発話文もそれぞれ被験者が現在時制の観点から映像刺激の内容を表現している。(10)では経路動詞も様態動詞も両方ともに未完了形である。同様に(11)では経路動詞が分詞形であり、様態動詞が未完了形である。いずれの文でも両動詞が時制標識としてみなしうる。そのためこれらの文だけでは主要部を同定することができない。そこで同じ映像刺激から得られた別の被験者の発話文に着目する。以下の(12)は(10)と同じ映像刺激(C1-14)から、そして(13)は(11)と同じ映像刺激(C1-10)から得られた別の被験者らによる発話文である。

(12) š-saxš xrez ka-yzerri men l-binaya

DET-person exit.PRF IPFV-walk from DET-building

「人が走りながら建物から出た」(08-C1-14)

(13) hbeɬ ka-yjerri f=d-droj

descend.PRF IPFV-run in=DET-stairs

「(彼は)階段を走りながら降りた」(06-C1-10)

(12)と(13)の発話文はそれぞれ(10)で未完了形であった経路動詞と(11)で能動分詞形であった経路動詞が完了形に活用している。その一方で、様態動詞は前置詞句を先行しているという

違いはあるものの、未完了形で用いられている。このように実験で得られたデータでは様態動詞と経路動詞が共起している場合において一貫して様態動詞が付帯状況を表す未完了形として用いられている一方で、経路動詞が文の時制標識を担う主要部の位置で用いられていた。

実験で得られた全ての経路動詞について、参考の日本語訳とその動詞の表す経路を含めて以下の表2に示す。

表2. 実験で得られた経路動詞の一覧

動詞語彙	意味	経路
wʃel	着く	TO
tʃeʃ	上がる	UP
nzel	下りる	DOWN
hbet	下りる	DOWN
taḥ	落ちる	DOWN
daz	通る	PASS
fat	通る	PASS
qteʃ	渡る	CROSS
dar	回る	AROUND
ḥeyyed	退く	FROM
xella	離れる	AWAY
beʃʃed	遠ざかる	AWAY
qerreḅ	近づく	NEAR
xreʒ	出る	OUT
dxel	入る	INTO
txešša	突っ込む	INTO

## 5.2. 前置詞による経路表現

アラビア語モロッコ方言では経路を表す前置詞も存在する。まず経路局面における起点や通過点を表す前置詞“men”と着点を表す接語“l”が挙げられる。

(14) は“men”、(15) は“l”の用例である。

(14) d-derri xreʒ men dar-u ka-ytmešša

DET-boy exit.PFV from house-his IPFV-walk

「少年は家から歩いて出た」 (15-C1-13)

(15) kleb mša men š-šebka l=l-qfez

dog.INDF go.PFV from the-net to=DET-cage

「犬が網からケージのところに行った」 (11-C1-44)

以下の (16) 及び(17) は“men”が起点ではなく通過点を示している例である。

- (16) wahd s-siyd dxel men l-bab b=šwiya  
 INDF DET-man enter.PFV from DET-door with=little  
 「ある男が戸を通してゆっくり入った」 (05-C1-11)

- (17) r-raʒl ka-yʒerri men ḥda l-wad  
 DET-man IPFV-run from beside DET-river  
 「男は川のそばを走っている」 (19-C1-16)

一方でもともと「方面」を意味する名詞である“ʒiha”は方向性を示す前置詞として機能している。(18) のように単体の前置詞句だと着点の方向性の経路を示すが、(19) に見るように起点の“men”との複合前置詞句を形成することで起点の方向性も表すこともできる。

- (18) raʒl mša ʒiht t-tebla  
 man.INDF go.PRV towards DET-table  
 「男性がテーブルの方へ行った」 (16-C1-02)
- (19) l-bent ʒerrat men ʒiht l-parasol  
 DET-girl run.PFV from direction.P DET-parasol  
 「少女はパラソルの方から走った」 (12-C1-32)

本稿ではこれらの前置詞を経路前置詞と呼び、位置関係を示す前置詞を位置前置詞と呼び区別することにする。経路前置詞の一覧を以下の表 3 に示す。また参考に表 4 に一部の位置前置詞を示す。

表 3. 経路前置詞の一覧

経路前置詞	経路情報
men	起点・通過点
l	着点
ʒiht	方向性

表 4. 位置前置詞の例

位置前置詞	意味
f	～の中に
teḥt	～の下に
fuq	～の上に

(ma) bin	～の間に
qeddam	～の前に
mura	～の後ろに
ħda	～のそばに

---

### 5.3. 複数経路の表現形式

今回の実験では一つの映像刺激に最大3つの経路局面を含む、複数経路の場面があった。この場合、例えば前節の(15)のような前置詞を項とする単体の動詞句だけでなく、それぞれの経路局面ごとに動詞句で分けて表現される形式も見られた。

以下の(20)は3つの経路局面が含まれる場面で、等位接続詞によって動詞句が並列されている表現の一例である。一方で(21)のように接続詞の省略もなされることがあり、その場合には節の切れ目はポーズによって音韻的に示され、動詞句は直に並列する。

- (20) waħd l-kelb xreġ men l-xiyma, o mša ka-yġerri men teħt  
 INDF DET-dog exit.PFV from DET-tent, and go.PFV IPFV-run from under  
 ‘la barrière’ o dxel l=l-qefs  
 ‘the barrier’ and enter.PFV to=DET-cage

「犬がテントから出た。そして障害物の下を走って行った。そしてケージに入った。」(12-C1-41)

- (21) l-kelb xreġ men s-slla, daz men teħt t-ṭabla, dxel  
 DET-dog exit.PFV from DET-basket pass.PFV from under DET-table enter.PFV  
 l=dar-u  
 to=house-his

「犬が籠から出た。テーブルの下を通った。自分の家に入った」(07-C1-41)

また以下の(22)のように主節の事象に対して従属節が後続事象を表す構文も見られた。等位接続詞“o”が用いられているため、一見すると上記のような単純に等位接続された複文のようである。しかし前節は完了形の動詞が文全体の時制を担っており、定形性を示す一方で、後節は独立人称代名詞と定形性のない無標形の動詞から構成されている。つまり後節が前節に従属している付帯状況の文である。

- (22) waħd l-kelb daz men teħt waħd t-ṭabla o huwa ydxel l=dar-u  
 INDF DET-dog pass.PFV from under INDF DET-table and he enter to=house-his

「ある犬があるテーブルの下を通って自分の家に入った」(11-C1-43)

この構文の従属節は経路動詞のみに限定されているわけではなく、以下の(23)では「走る」を

意味する“zerra”という動詞が無標形“yzerri”で用いられている。また (23) の文が (21) と同じく接続詞の省略が起きている構文であることも注記する。

- (23) derri kan ḥda tebla o huwa yzerri, mša f=ḥal-u  
 boy.INDF be.PFV beside table.INDF and he run, go.PFV in=state-his  
 「少年がテーブルのそばにいたが、走り出した、(そして) 消えて行った」 (15-C1-04)

## 6. 実験結果に関する考察と議論

本節では、3 節で概観した先行研究の議論と 5 節で観察したデータを踏まえて、松本 (2017) の枠組みに従ってモロッコ方言の類型論的な位置づけについて議論する。まず 6.1 節で Talmy のイベント統合の類型論 (2000b: Ch3) では説明できないアラビア語モロッコ方言の移動表現を取り上げ、松本 (2017) の経路の表示位置に基づく類型論を導入する。そして 6.2 節では実際にアラビア語モロッコ方言において経路がどのように表されるのか各経路の計量的な分析を行うことで、主要部表示型経路、主要部外表示型経路、主要部・主要部外共表示型経路の 3 種類に分けられることを明らかにする。6.3 節ではさらにその 3 種類の経路が単一の語彙によって表される経路と複数の語彙によって表される経路に分けられることを示す。そしてアラビア語モロッコ方言がこれまでの移動表現の類型論の目指すような二分的類型に当てはめることが困難であることを主張する。そして 6.4 節では 6.2 節と 6.3 節の議論を踏まえて各経路の特徴をまとめる。

### 6.1. 様態動詞に含意される終結性とイベント統合の類型論の限界

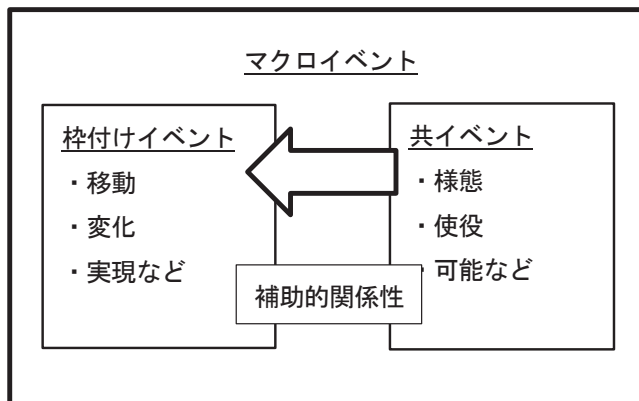


図 4. マクロイベントの構造 (2000b: 221)

イベント統合の類型論 (Talmy, 2000b: Ch.3) は、上の図 4 に示すように時間的な枠組みを指示する枠付けイベントとそれに対し補助的な関係性を持つ共イベントという個別の要素によってマクロイベントが構成されており、経路と様態はそれぞれ枠付けイベントと共イベントに対



応しているという主張がなされている。枠付けイベントである経路が主要部によって表される言語は動詞枠付け言語に属し、主要部外の付随要素によって表される言語は付随要素枠付け言語に属する。そのため、この類型論では主要部が重要な焦点となる。

アラビア語モロッコ方言では、5.1節で見たように経路が主要部に置かれる場合に、様態は付加詞の前置詞句 (7-8) や様態動詞による従属節 (10-13) によって付帯的に示されていた。そのため、確かにこの点においては経路に対する様態の補助的關係性という動詞枠付け言語の典型的な特性が現れているといえる。

しかし実験で見られた一部の様態動詞は経路動詞のように必ず主要部として使用される。以下の (24) の“taht”という動詞はそのような動詞の例である。

- (24) l-kura      taht      f=l-ma  
 DET-ball    fall.PFV    in=DET-water  
 「ボールは池に落ちた」 (03-C1-40)

(24) で主要部に用いられている“taht”という動詞は下への方向性の経路 (DOWN) だが、この動詞は単なる下の方向性を持つ経路を示す動詞 (“hbet”や“nzal”) とは確実に異なる点がある。それは動作主の非意志性を意味要素として包入した動詞だということである。

2.1 節で Talmy (2000b) が移動事象において様態とは「移動における副次的行為や状態」と定義していることを述べた。この定義に従うとこの非意志性は様態の一種であり、つまり共イベントの要素であるように考えられる。しかしそうなるとこの動詞には枠付けイベントと共イベントに含まれることになる。従って主要部に枠付けイベントと共イベントが統合されていることになりマクロイベントの構成性が失われてしまう。

次に以下の (25) は子犬がテーブルの下を潜ってケージの中に走って入る様子の刺激映像に対して得られた発話データであり、(26) は女性が走ってきてパラソルの下で止まる映像刺激に対して得られた発話データである。注目すべき点は (25)、(26) の主要部に見られる“txešša”という動詞である。この動詞はもともと「詰め込む」という意味の動詞“xešša”に受動化・再帰化接頭辞の“t-”がついた派生動詞である。

- (25) kelb      txešša      f=l-qfes    dyal-u      mn    teht    t-tebla  
 dog.INDF    dash;to.PFV    in=the-cage POSS-his    from    under    DET-table  
 「犬がテーブルの下からケージの中に突っ込んだ」 (16-C1-43)

- (26) mra              kant    katzerri    o      txeššat    teht    l-parasol  
 woman.INDF    be.PFV run.IPFV    and    dash;to.PFV    under    DET-parasol  
 「女性が走っていて、パラソルの下に突っ込んだ」 (16-C1-32)

この動詞は犬や人が走っている場面で用いられていることから移動の他に様態として勢いが

表されていると考えられる。一方で経路については地への着点を示している。位置前置詞句によって (25) では地の「中」、(26) では「下」という位置関係が示されている。構成する意味要素としてこの動詞には様態・経路・移動の3要素を包入しているといえる。つまりこの主要部においても (24) と同様に経路と様態、つまり枠付けイベントと共イベントが統合されている。

前述のように (24) 及び (25)、(26) の動詞は経路動詞のように主要部に限定されており、付帯状況の用法は非文である。そしてこれらの動詞にはイベント統合の類型論の観点では枠付けイベントと共イベントの両方が含まれているように解釈できる。

表 5. 様態動詞と付帯状況

語彙	意味	付帯状況
zerra	走る	○
tmešša	歩く	○
trola / tdehrez / tkerkeb	転がる	○
taḥ	落ちる	×
neqqez	跳ねる	×
txešša	突っ込む	×

表 5 は異なる統語的振る舞いを見せる様態動詞の一覧である。付随要素であるところの付帯状況の表現形式がなされるかどうかで大きく分かれる。この主要部に限定される様態動詞とそうでない様態動詞の大きな違いは経路の包入による語彙的アスペクトにおける終結性によるものだと考えられる。“taḥ”や“txešša”、“neqqez”のような主要部に限定される様態動詞は非継続的な、あるいは瞬間的な動作を含意しているもので終結的である。対照的に“zerra”や“tmešša”のような主要部外にも現れる様態動詞は継続性のある動作を指示しており、その動作の終結を含意しておらず、非終結的である。

Talmy の様態と経路の関係性に基づく類型論ではこの経路が包入される様態動詞、つまり終結的な様態動詞については十分な説明が与えられない。アラビア語モロッコ方言では終結的な様態動詞は時間的な枠組みを指示するため、共イベントが位置する従属節には現れず、経路動詞と同じように枠付けイベントの主要部の位置のみに限定されている。つまり Talmy の提示する (24) のような共イベント（様態）による枠付けイベント（経路）への補助的關係性が現れず、両方ともに同一の位置で表現されている。これは言い換えればマクロイベントに想定されるべき構成性が様態の補助的關係性の不在によって崩れている。この点において Talmy のイベント統合類型論の限界が示されているといえる。

一方で松本 (2017: 6) は Talmy の類型論を踏まえた別の観点を提案している。松本の類型論では経路が節中のどの表現形式で表されるかという部分にのみ焦点を絞り、マクロイベントと

それに基づき想定される様態と経路の関係性を捨象している。そして動詞枠付け言語と付随要素枠付け言語の対立をより一般化させて、経路主要部表示型言語と経路主要部外表示型言語の対立へ修正している。この類型ではそれぞれに動詞枠付け言語と付随要素枠付け言語の対立が包含されており、イベント統合の類型論の類型の対立との対応関係は保たれている。松本の類型論の観点からであれば、経路を含む終結的な様態動詞によるマクロイベントの構成性の問題が解消される。従って次節以降では松本の類型論を採用し、アラビア語モロッコ方言において経路がどこで表されるかという点に着目する。

## 6.2. アラビア語モロッコ方言は経路主要部表示型言語なのか

これまでアラビア語やヘブライ語を含むセム語が動詞枠付け言語（つまり主要部表示型言語）とされてきたことは述べた。しかし経路が主要部で表されるとは言っても、それは実際にどのような経路であっても言えることだろうか。以下の表6は今回の実験において設定された14種類の経路場面に関する各単文発話において主要部で様態動詞・経路動詞・直示動詞がどのくらい指定されているか、それぞれの出現回数と合計との割合を表したもので、経路の指定回数の多さによって降順になっている。そして図4は各経路における様態・直示・経路の指定率をグラフで表したものである。

表 6. 主要部における様態・経路・直示の指定率

経路の種類	様態		経路		直示		合計	
/TO OUT/	0	0%	32	100%	0	0%	32	100%
/AROUND/	2	6%	33	94%	0	0%	35	100%
/DOWN/	2	6%	31	89%	2	6%	35	100%
/UP/	3	9%	26	81%	3	9%	32	100%
/TO IN/	3	10%	25	81%	3	10%	31	100%
/CROSS/	5	17%	22	73%	3	10%	30	100%
/THROUGH/	4	20%	12	60%	4	20%	20	100%
/PAST/	11	33%	16	48%	6	18%	33	100%
/VIA BETWEEN/	13	41%	13	41%	6	19%	32	100%
/FROM/	8	36%	3	14%	11	50%	22	100%
/VIA UNDER/	19	50%	4	11%	15	39%	38	100%
/ALONG/	26	67%	3	8%	10	26%	39	100%
/TOWARD/	10	31%	3	9%	19	59%	32	100%
/TO/	9	41%	1	5%	12	55%	22	100%

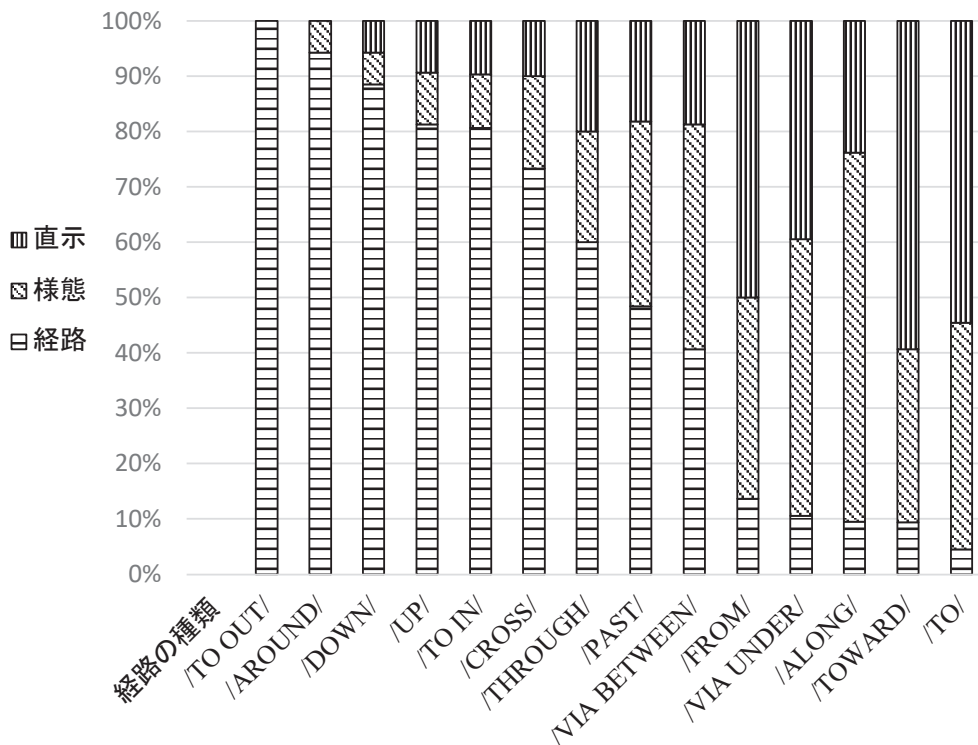


図5. 場面別の様態・経路・直示の主要部指定率

表6及び図5によりまず、全ての場面で経路が優勢ということは決してなく、その他の要素のいずれかが優勢な場面が様々に表れていることが確認できる。図5の左側からより詳細に見ていくと、/TO OUT/から/VIA BETWEEN/まではおおよそ10%ごとに漸次的に経路の指定率が下がる。/VIA BETWEEN/では経路の指定率が50%を下回っており、経路と様態の指定率が両方も41%と拮抗しているためにこれ以降右の経路は主要部表示型の表現となりにくいといえる。

しかし/VIA BETWEEN/から/FROM/でもさらに30%も経路の指定率が落ち、それ以降は右に向かってわずかな減少が見られるだけである。この点から/VIA BETWEEN/より左側の経路と/FROM/から右側の経路には顕著な差異があることは確かである。またさらに、/FROM/、/TOWARD/、/TO/という方向性に関わる経路では直示の指定率が50%以上あるが、/VIA UNDER/、/ALONG/では様態の指定率が50%以上である。この差異も注目すべき点だろう。

次に各経路の特徴と経路の表示位置の関係性に着目する。そのためにまず各場面を経路の性質により次のように分ける。まず方向性の経路 (/TOWARD/、/FROM/、/TO/)、次に通過局面の経路 (/VIA UNDER/、/VIA BETWEEN/、/PAST/、/THROUGH/、/CROSS/、/AROUND/)、最後に位置関係に関して対を持つ経路 (/TO OUT/、/TO IN/、/UP/、/DOWN/)、以上の3種類である。

上記の3種類の経路について、以下の表7、図6では各場面における単文と複文を含む主要

部による経路表示数と主要部外要素である経路前置詞・位置前置詞による経路表示数を示したものである。

表 7. 各経路における主要部・主要部外要素の経路表示数と各経路場面の数

	主要部	経路前置詞	位置前置詞
/TOWARD/	3	26	0
/TO/	4	25	0
/FROM/	2	15	0
/ALONG/	0	1	27
/VIA UNDER/	5	1	37
/VIA BETWEEN/	21	3	27
/PAST/	22	0	11
/THROUGH/	16	0	11
/CROSS/	33	0	4
/TO OUT/	41	0	0
/TO IN/	33	0	5
/AROUND/	34	0	0
/UP/	33	0	0
/DOWN/	34	0	0

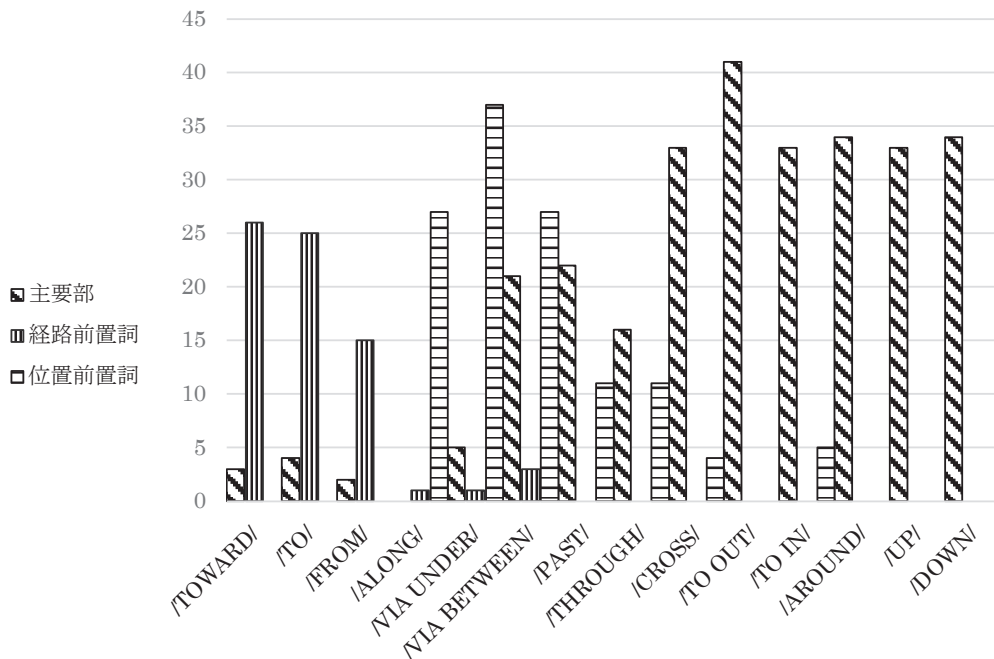


図 6. 各場面における主要部・主要部外 (前置詞) の合計経路表示回数

図6を左から見ていくと、まず方向性の経路においてのみ、経路前置詞による経路表示数が高著しく高いことがわかる。その一方でこれらの経路は図5では直示の指定率が高かった。このことから方向性の経路では直示動詞と経路前置詞によって移動の表現がなされる傾向があると考えられる。

一方、図6で位置前置詞による経路表示数が高かったのは、図5で様態の指定率が顕著に高かった/ALONG/と/VIA UNDER/、/VIA BETWEEN/である。これらの経路では上述の方向性の経路場面とは異なり、移動を包入している様態動詞と位置前置詞によって移動表現がなされているのだと考えられる。しかし様態と経路の主要部指定率が拮抗していた/VIA BETWEEN/では主要部による経路表示数も高く、その点において明らかに/ALONG/と/VIA UNDER/とは異なった特徴を持つ。

以上の場面は類型論の観点ではアラビア語モロッコ方言は経路主要部外表示型の傾向を示しているといえる。そのため、主要部による経路表示数が高い/VIA BETWEEN/を除いたこれらの主要部外表示型の傾向を強く示している経路 (/TOWARD/、/FROM/、/TO/、/ALONG/、/VIA UNDER/) を主要部外表示型経路と呼ぶことにする。

これらの場面に次いで残りの通過経路の場面 (/PAST/、/THROUGH/、/CROSS/) でも/CROSS/を除くと、少なくない数で位置前置詞による主要部外経路の表示がなされており、さらに言えば主要部表示と主要部外で経路表示数が比較的近い。/VIA BETWEEN/も位置前置詞による経路表示数の方が高いものの、その主要部の際立ちから/PAST/と/THROUGH/の傾向に近い。つまりこれらの通過経路の場面では主要部表示と主要部外表示のどちらでも表される傾向にあるといえる。これら、主要部・主要部外で経路表示数が拮抗している経路を主要部・主要部外共表示型経路と呼ぶ。

ここまで、図5では見えてこなかった主要部外での経路の表示率から、主要部外表示型経路と主要部・主要部外共表示型経路の2種類の傾向が明らかになった。それと同時に主要部表示型の傾向を持つ経路が明らかになった。すなわち、/CROSS/から右端の/DOWN/までの経路場面である。これらの経路では主要部外要素による経路表示数が顕著に低いことが図5より示されている。ここまでの流れを汲んでこれらの経路を主要部表示型経路と呼ぶ。

各経路場面における3種類の経路の表示傾向をまとめると以下ようになる。

- 主要部表示型経路—経路が主要部で表示される傾向の経路場面  
{/AROUND/, /CROSS/, /UP/, /DOWN/, /TO IN/, /TO OUT/}
- 主要部外表示型経路—経路が主要部外要素（前置詞）で表示される傾向の経路場面  
{/TO/, /TOWARD/, /FROM/, /VIA UNDER/, /ALONG/}
- 主要部・主要部外共表示型経路—経路が上記の両方で表示される傾向の経路場面  
{/VIA BETWEEN/, /PAST/, /THROUGH/}

以上のように動詞粹付け言語(または経路主要部表示型)と想定されていたアラビア語モロ



ッコ方言には経路場面によって経路主要部表示型と経路主要部外表示型の2種類の異なる傾向と、さらに主要部と主要部外のどちらでも表される傾向のある経路も見られた。

### 6.3. 単一の語彙で表される経路と複数の語彙の構成で表される経路

前節では経路の主要部対主要部外要素の表示位置の傾向によって経路を3種類に分けられることを示したが、次にそれぞれの経路を表現する語彙項目の特性に着目することで図6から明らかになった経路場面間における経路表示の差異について別の側面から考察したい。

まず主要部表示型経路については、アラビア語モロッコ方言では以下の表8に示すようにこれらの経路が位置関係を含めてすべて以下のように単一の動詞語彙で表すことができる。この理由は図と地の位置関係がこの動詞語彙に含まれているため、通過局面の経路のように位置前置詞によって位置関係を示す必要がないためだと考えられる。実際、図6で明らかのようにこれらの動詞は経路情報を持つ前置詞との共起がほとんどない。

表8. 単一の動詞語彙によって表される経路

動詞語彙	経路情報
hbet	/DOWN/
tleʕ	/UP/
xrez	/TO OUT/
dxel	/TO IN/
dar	/AROUND/
qteʕ	/CROSS/

次に主要部外表示型の経路は前置詞によって表現されるものだが、この前置詞は経路前置詞と位置前置詞の2種類に分けることができる。経路前置詞は5.2節で触れたように/TO/、/TOWARD/、/FROM/にそれぞれ対応する語彙があり、この場合も図と地の位置関係及び方向性が語彙に含まれている。そのため経路前置詞と方向性の経路場面の関係は上記の経路動詞と主要部表示型経路の関係に類似するものである。

一方で/ALONG/、/VIA UNDER/の経路に対応する経路前置詞はアラビア語モロッコ方言には存在しないため、図6で示されていたように位置前置詞が多用されている。また図5でこれらの経路の場面では主要部にほとんど様態動詞が指定されることが多いことが示されており、この2点から位置前置詞と移動を包入する様態動詞との構成によって経路として表現されていると考えられる。以下の(27)は/ALONG/の場面におけるそのような例である。

- (27) derri      ka-yzerri    ḥda    berka      d=lma  
 boy.INDF    IPFV-run    beside    pound.INDF    POSS=water  
 「少年が池のそばを走っている」 (15-C1-15)

では前述の経路前置詞による経路表示の場合に、なぜ主要部に様態動詞より直示動詞が指定されていることが多いのか。これは経路局面による違いが関係しているものだと考えられる。つまり、様態動詞と位置前置詞による移動表現がなされている経路 (/ALONG/、/VIA UNDER/) は通過局面の経路で、通過点となる地との位置関係を位置前置詞で示すことで移動の経路が表される。それに対し、直示動詞と経路前置詞による表現形式の経路 (/TO/、/TOWARD/、/FROM/) は経路局面のうち、起点あるいは着点の局面が含まれるものである。これは直示動詞によって話し手や聞き手を軸として定め、経路前置詞によって地に起点あるいは着点という図との位置関係を付与することで、図の移動の方向性を表現しているのだと考えられる。

主要部・主要部外共表示型経路についても、/ALONG/、/VIA UNDER/と同様にそれぞれの経路を単一の語彙では表現することができない。これらの単一の語彙によって表現できない経路がすべて共通して、経路局面のうち通過局面に属するという点に着目したい。

アラビア語モロッコ方言には通過局面の移動を表す“daz”という動詞がある。しかし“daz”は参照物との位置関係を明確にするために前置詞句を項に取る必要があり、起点・通過点を示す経路前置詞の“men”と位置前置詞の複合、または位置前置詞の単体で句を形成する。この位置関係が動詞の意味に含まれていないという点が上述の表 8 に示した主要部表示型経路の動詞と異なる点である。以下、(28)/PAST/、(29)/VIA BETWEEN/、(30)/VIA UNDER/、(31)/THROUGH/の順に実験で見られた“daz”の用例を示す。

- (28) daz            men    ḥda            l-‘boite aux lettres’  
 pass.PFV    from    beside    DET-post  
 「(彼女は) 郵便ポストのそばを通った」 (07-C1-19)
- (29) l-weld        daz        ka-yzerri        mabin    zuɜ    šɜrat  
 DET-boy    pass.PFV    IPFV-run        between    two    trees  
 「少年は2つの木の間を走りぬけた」 (17-C1-30)
- (30) l-kelb        daz        men    teht    l-kursi  
 DET=dog    pass.PST    from    under    DET-chair  
 「犬は椅子の下を通った」 (04-C1-42)
- (31) l-weld        daz        west            l-‘kiosque’  
 DET-boy    pass.PFV    center.P    DET-kiosk  
 「少年は東屋の中を通った」 (17-C1-21)

先に述べたように/CROSS/や/AROUND/のような経路を表す動詞 (“qteɣ”、“dar”) は同じ通過局面の経路でもそれぞれ「上」であったり、「周り」であったり経路における図と地の位置関係が動詞自体に含まれている。一方で以上の例ではそれぞれ前置詞句によって通過局面の移動における位置関係が示されている。図 6 における主要部・主要部外共表示型経路の主要部と位置前置詞による経路表示の高さはこのことによるものだと考えられる。

本節では経路と語彙項目の特性に着目した。そして地との位置関係を含むことで単一の語彙によって表現される経路と、地との位置関係を主要部と主要部外要素の構成で示すことで複数の語彙によって表される経路の2種類に分けられることを示した。また主要部外表示型経路における移動の表現形式には様態動詞と位置前置詞の形式と直示動詞と経路前置詞の形式があり、様態動詞と位置前置詞の形式は通過局面の経路の移動を表し、直示動詞と経路前置詞の形式は起点・着点局面の経路の移動を表すことも明らかにした。

#### 6.4. アラビア語における経路ごとの表現形式とその特徴

経路主要部表示型言語（または動詞枠付け言語）としてみなされるセム諸語のアラビア語モロッコ方言であるが、今回の実験を通じて経路の種類によっては経路を主要部で表示する形式と主要部外の要素で表示する形式、そして主要部・主要部外要素の両方で表示する形式の3通りの傾向が内在することが明らかになった。

以下の表9は本稿において議論したアラビア語モロッコ方言の各経路の特徴をまとめたものである。各経路はおおよそ経路の主要部表示率の高さに基づいて降順で並べられており、かつ下へ行くほど主要部外要素での表示率が高くなる。概して通過局面を表す経路がその他の経路に比べると多様な表現形式を持つことが確認できる。

表9. アラビア語モロッコ方言の各経路における移動表現の傾向的特徴

	指定主要部	経路の表示位置	経路表現
/TO OUT/	経路	主要部	単一語彙
/AROUND/			
/DOWN/			
/UP/			
/TO IN/			
/CROSS/			
/THROUGH/	経路・様態・直示	主要部・主要部外	複数語彙
/PAST/			
/VIA BETWEEN/	様態	主要部外	
/VIA UNDER/			
/ALONG/			
/FROM/	直示		
/TO/			
/TOWARD/			

## 7. 最後に

本研究は、アラビア語モロッコ方言が移動表現の類型論における経路主要部表示型言語（動詞枠付け言語）と経路主要部外表示型言語（付随要素枠付け言語）のどちらにも分類できないことを示した。さらに、経路の種類によって主要部によって表示される経路、または主要部外要素によって表示される経路、主要部でも主要部外でも表示される経路の3種類が見られることも明らかになった。

本来、主要部表示型と主要部外表示型の対立は言語類型論の観点から各言語の特性を説明することを目的とした対立構造である。しかしアラビア語モロッコ方言という単一の言語のうちにはこのような対立を超える複雑な構造が内在している。少なくとも現在の移動表現の類型論の視点ではアラビア語モロッコ方言は経路の種類によって経路主要部表示型としても、経路主要部外表示型としてもみなすことが可能である。いずれの場合においても経路の範疇について慎重に定めなければならない。

一方で経路に関する主要部表示と主要部外表示の対立は単一の言語内における移動表現の記述にも有効であった。本研究は言語の移動表現の類型論において各経路がどのように言語化されるのかという新たな視点に基づく議論の重要性を示した。

### 記号・略語一覧

- ACC 対格
- DET 限定詞
- FEM 女性
- FUT 未来時制接頭辞
- INDF 不定
- IPFV 未完了相接頭辞
- MSC 男性
- P 前置詞
- POSS 所有標識
- PRF 完了形
- PTCP 分詞
- SG 単数
- SUBJ 主格
- “ 他言語へのコード切り替え

### 参考文献

- Alhamdan, Bandar. Alenazi, Oudah. Maalej, Zouheir A. (2018) Motion verbs in Modern Standard Arabic and their implications for Talmy's lexicalization patterns. *Language Sciences*, vol. 69, 43–56.
- AlMurshidi, Ghadah. (2013) The expression and conceptualization of motion through space and manner

- of motion in Arabic and English: A comparative analysis. *International Journal of Literacy, Culture, and Language Education*, vol. 2, 57–76.
- Benmamoun, Elabbas. (1999) Arabic morphology: The central role of the imperfective. *Lingua*, vol. 108, no. 2–3, 175–201.
- Caubet, Dominique. (1993) *L'arabe Marocain*. 2 Vols. Paris & Louvain: Peeters.
- Darine, Saidi. (2007) Typology of motion event in Tunisian Arabic. *Proceedings of LingO 2007*, 196–203.
- Hallman, Peter. (2015) The Arabic imperfective. *Journal of Afroasiatic Languages and Linguistics*, vol. 7, no. 1, 103–131.
- Louhichi, Imed. (2018) The description of motion in Tunisian Arabic: A thinking-for-speaking approach. *Sino-US English Teaching*, Vol. 15, no. 7, 43–56.
- Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In: Shuji Chiba et al. (eds.) *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 403–418. Tokyo: Kaitakusha.
- Slobin, Dan. (1997) *Mind, Code and Text*, In Joan Bybee et al. (eds.) *Essays on Language Function and Language Type: Dedicated to T. Givón*, 437–467. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Talmy, Leonard. (2016) Properties of Main Verbs. *Cognitive Semantics*, vol. 2, 133–63.
- Versteegh, Kees. (2014) *The Arabic Language*. NED-New edition. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 松本曜 (編) (2017) 『移動表現の類型論』 東京: くろしお出版.

## 謝辞

本研究の実験には国立国語研究所理論・対照研究領域教授の松本曜先生がご厚意により、統一的な通言語的ビデオ実験「国立国語研究所 移動表現プロジェクト」の C 実験を提供してくださいました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

また本研究の遂行及び本稿の執筆にあつたては東京大学大学院人文社会系研究科准教授の長屋尚典先生にご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

なお、本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(プロジェクトリーダー: 窪菌晴夫)「動詞の意味構造」班(リーダー: 松本曜)による成果の一部である。また本稿は平成 31 年度に東京外国語大学へ提出した卒業論文の一部を加筆修正したものである。

## 付録 1. 映像刺激の構成一覧

映像刺激番号	図	地	様態	経路
C1-01	男性 1	広場	WALK	TO
C1-02	男性 1	広場	RUN	TO

C1-03	男性 1	広場	WALK	FROM
C1-04	男性 1	広場	RUN	FROM
C1-05	男性 1	広場	WALK	TOWARD
C1-06	男性 1	広場	RUN	TOWARD
C1-07	女性	階段	WALK	UP
C1-08	男性 2	階段	RUN	UP
C1-09	女性	階段	WALK	DOWN
C1-10	男性 2	階段	RUN	DOWN
C1-11	男性 1	建物	WALK	INTO
C1-12	男性 1	建物	RUN	INTO
C1-13	男性 1	建物	WALK	OUT
C1-14	男性 1	建物	RUN	OUT
C1-15	男性 1	川	WALK	ALONG
C1-16	男性 1	川	RUN	ALONG
C1-17	女性	道路	WALK	ACROSS
C1-18	男性 2	道路	RUN	ACROSS
C1-19	女性	郵便ポスト	WALK	PAST
C1-20	男性 2	郵便ポスト	RUN	PAST
C1-21	男性 1	東屋	WALK	THROUGH
C1-22	男性 1	東屋	RUN	THROUGH
C1-23	男性 1	小丘	WALK	UP
C1-24	男性 1	小丘	RUN	UP
C1-25	男性 1	橋	WALK	VIA UNDER
C1-26	男性 1	橋	RUN	VIA UNDER
C1-27	男性 2	木	WALK	AROUND
C1-28	男性 3	木	RUN	AROUND
C1-29	男性 3	2本の木	WALK	VIA BETWEEN
C1-30	男性 3	2本の木	RUN	VIA BETWEEN
C1-31	男性 2	パラソル	WALK	TO-UNDER
C1-32	女性	パラソル	RUN	TO-UNDER
C1-33	男性 2	パラソル	WALK	FROM-UNDER
C1-34	女性	パラソル	RUN	FROM-UNDER
C1-35	男性 2	テーブル ベンチ	JUMP	DOWN
C1-36	男性 2	テーブル	JUMP	UP



		ベンチ		
C1-37	猫	椅子箱	JUMP	DOWN-INTO
C1-38	猫	椅子箱	JUMP	UP-OUT-TO
C1-39	ボール	池	ROLL	DOWN-INTO
C1-40	ボール	池	FALL	DOWN-INTO
C1-41	犬	庭	RUN	OUT-VIA UNDER-INTO
C1-42	犬	庭	RUN	OUT-VIA UNDER
C1-43	犬	庭	RUN	VIA UNDER-INTO
C1-44	犬	庭	RUN	OUT-INTO

## 付録2. 本研究の実験参加者一覧

No.	名前	性別	年齢	出身地
01	Chaimae	女性	18	Rabat
02	Soukaina	女性	19	Rabat
03	Yousra	女性	20	Rabat
04	Lamiae	女性	19	Rabat
05	Karim	男性	24	Kasbat Tadla
06	Nassim	男性	22	Rabat
07	Hamza (1)	男性	25	Rabat
08	Hamza (2)	男性	22	Rabat
09	Achraf	男性	21	Khenifra
10	Ayoub	男性	21	Khemissat
11	Zaid	男性	20	Rabat
12	Hiba	女性	21	Rabat
13	Hajar	女性	22	Sale
14	Aisha	女性	23	Rabat
15	Omar	男性	19	Sale
16	Ikram	女性	24	Rabat
17	Nouhayla	女性	22	Rabat
18	Asmae	女性	25	Kenitra
19	Mohamed	男性	26	Rabat
20	Othman	男性	20	Sale

# Motion Event Descriptions in Moroccan Arabic: An Experimental Study

Shun Takahashi

takahashi.shun.tp0@is.naist.jp

**Keywords:** Arabic, Moroccan Arabic, typology of motion expressions, path verb

## Abstract

Within the Talmyan typology of motion expressions (Talmy 2000), previous studies on Arabic varieties, such as Darine (2007), Louchichi (2018) (Tunisian Arabic), AlMurshidi (2013) (Gulf Arabic), and Alhamdan et al. (2018) (Modern Standard Arabic), have confirmed that Arabic varieties are verb-framed languages. However, little work has addressed the question of whether all paths are encoded equally in the main verb (head verb) regardless of their types. This paper will shed light on the variation of paths and demonstrate its significance in crosslinguistic perspective. I conducted an experiment with 20 native speakers of Moroccan Arabic, using a set of 44 video clips of motion events in which various paths are represented. The results of the experiment reveal that Moroccan Arabic tends to employ different coding positions for different types of paths, and therefore it defies the conventional dichotomy between verb-framed and satellite-framed languages.

(たかはし・しゅん 奈良先端科学技術大学院大学)